

# 乳がん 高度検診・治療センター NEW-す NO.63

2019.8

連載記事「特殊な乳がん」

## 特殊な乳がん (3) ～潜在性乳がん～

「特殊な乳がん」を連載していますが、今回は潜在性乳がんを取り上げます。聞き慣れない名称だと思いますし、頻度も非常に低いものですが、こういう乳がんもあるということは知っておいていただきたいので解説します。



### ■ 潜在性乳がんとは

乳がんはしばしば脇の下のリンパ節（腋窩リンパ節）に転移します。ごくまれにですが、腋窩リンパ節転移が契機となって乳がんが見つかることがあります。触診で触らないような小さな乳がんでも、マンモグラフィやエコー検査あるいはMRI検査などの画像診断が飛躍的に進歩した今日では、通常おおもとなっている乳がんを捉えることができます。これは潜在性乳がんとは呼びません。

ただ腋窩リンパ節転移がありながら、精密検査を駆使してもなお乳房内に異常を認められない（原発不明がんと呼びます）ことがあります。ほとんど乳房内のどこかに微小ながんが潜んでいるのですが、いちおう他臓器のがんからの転移の可能性も考えてPET検査を行います。それでもなお乳房以外に原発巣が確認できないときには乳房内のどこかに乳がんが潜んでいると考えるのが妥当で、潜在性乳がんと呼びます。

まず、診断と治療をかねて、腋窩リンパ節を全部つみとるリンパ節郭清が必要です。摘出したリンパ節の病理学的検査で乳がんの転移だと断定するのは困難なことも多いのですが、もしホルモン受容体が陽性であったりすると、まず潜在性乳がんと考えられます。

### ■ 潜在性乳がんの治療

潜在性乳がんでは腋窩リンパ節郭清は当然としても、乳房への局所治療が悩ましい問題です。手術（乳房全切除術）か乳房への放射線療法のいずれかが選択されますが、どちらが適切かは個々の患者さんの状況により総合的に判断し、十分なインフォームドコンセントののち治療方針が決定されます。乳房を手術しても病変が微小で病理検査でみつからないこともありえることを了解してもらう必要があります。術後の薬物療法は重要で、そのサブタイプに見合った薬物療法（抗がん剤、ホルモン剤、分子標的治療薬、など）が必要です。

乳がんの自己検診では乳房だけでなく脇の下のリンパ節が腫れていないかもチェックする習慣を身につけておいてください。



乳腺外科

稲治 英生

市立具塚病院  
TEL : 072-422-5865

